

# ナショナルか、ローカルか、もしかしてネイティブ？：私と平賀源内はどのレベルで日本を意識するのか

著者	横山 泰子
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	9
ページ	113-126
発行年	2012-03-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00022650">http://doi.org/10.15002/00022650</a>

# ナショナルか、ローカルか、 もしかしてネイティブ？ ——私と平賀源内はどのレベルで日本を意識するのか

横山 泰子

## はじめに

2009年9月9・10日、法政大学ポアソナード・タワーにおいてワークショップ「江戸時代におけるナショナリズムの表現」が開催された。その成果をふまえ、同年11月に科学研究費「近世日本の大衆文化における日本意識の表現—17・18世紀を中心に」（基盤研究B 研究代表者 田中優子）の申請がなされ、翌年4月に正式に採択された。私はワークショップの段階から参加し、2010年度は科研の分担者として研究をすすめ、その成果の一端として、2011年2月26・27日のシンポジウム「日本意識の時空」で報告する機会を得た。以下は、シンポジウムの席での私の問題提起的報告「ナショナルか、ローカルか、もしかしてネイティブ？」をもとに加筆したものである。

## ナショナルか、ローカルかという問い

ワークショップの席で、田中優子氏は、「張り抜きの富士—ナショナルか、ローカルか」という題で講演をされた。平賀源内の作品『風流志道軒伝』に見られる富士山の描かれ方が、ナショナルなものかローカルなものかを問うと、断定は難しく、どちらともとれるとのことであった。ナショナルか、ローカルかという演題はそこに由来しており、私は非常に示唆的な問いであったと思う。ナショナルもローカルも、そして語尾に「イズム」をつけたナショナリズムもローカリズムも、いうまでもなく外来語である。だが、どの語ももはやカタカナ語として通用する便利な言葉である。あえて訳せば、ナショナルは「国

民的」「国家的」、ローカルは「地方的」等になろう。元来英語での national と local が対義語であることから、「ナショナルか、ローカルか」という問いは、通常の問いとして機能すると思われる。田中氏自身は、その後の研究成果報告集で講演内容を活字化<sup>1)</sup>する際、ナショナルやローカルという言葉が削ってしまわれたが、日本意識を扱う本研究プロジェクト上、「ナショナルか、ローカルか」という問いかけは重要な意味を持っているように思える。一度、ナショナルとローカル、ナショナリズムとローカリズムの関係を議論し、整理することは、本研究プロジェクトの推進に意味があるのではないかと思う。私も思いつきの域を出ないおそれを承知しつつ、自分なりの考えを示してみたい。

## ネイティブという言葉

田中氏の問いに刺激され、私は『風流志道軒伝』を再読してみた。富士山が話題になる場面とは、主人公・浅之進（志道軒の幼名）が中国にたどり着いて、皇帝に問いかけて、「我が故郷の日本には、不二といへる名山あり」と述べる所から始まる<sup>2)</sup>。この表現をそのまま受け取れば、浅之進にとって、富士山とは「我が故郷の日本」を代表するよきものである。田中氏の指摘通り、『風流志道軒伝』の富士の描かれ方は、全体的にはナショナルなもののようにもローカルなもののようにもあるが、少なくとも主人公にとっては故郷とつながっている。そうすると、本作における富士山を、「ネイティブなもの」と解釈することが可能になるのではなからうか。

英語の native には、「故郷の」「出生地の」という意味があることから、私は「ナショナル」「ローカル」からの連想で、「ネイティブ」を思いついた。安易に外来語を使うことを自省しつついえば、このネイティブなる語は、ナショナル、ローカルに比してあまり一般的には使われない（日本では専ら native speakers of English という限定的な意味で用いられるように思う）。英語の native とその派生語は日本ではまだカタカナ語として定着してはいない。英語圏に居住したこともなく、ことさら英語を得意とするわけでもない私の脳裏に、native なる語が浮かんだのは、かつてこの言葉で苦勞した経験があったからだ。

私は、かつてアメリカの研究者による日本の国学についての本（原題 Peter Nosco, *Remembering Paradise; Nativism and Nostalgia in Eighteenth-Century Japan*, 1990 the President and Fellows of Harvard College）の翻訳作業に参加したことがある。邦題は『江戸社会と国学 原郷への回帰』（M.W. スティール・小島康敬監訳、星山京子・横山泰子・平山美樹子・谷村玲子訳）で、1999年にぺりかん社から刊行された。この本の特徴の一つは、国学を広義の nativism と national learning に区別しているという点だ。ノスコは、前者をいわゆる漢学に対置され日本を広く研究対象とする学問＝日本学、後者を日本の伝統的文献群の中から「古道」を抽出していく思想性の強い学問と考えている。

翻訳作業にあたっては、副題にもある nativism という言葉をどのように日本語に訳すかが問題となった。nativism は辞書でみると、「排外主義」「原住民保護主義」「土着主義」等に訳されるが、いずれを使ってみても落ち着きが悪いように感じられた。原典の文脈にそえば「和学」、考えようでは「故郷主義」「ふるさと主義」等の思い切った意識もありえたと思う。翻訳チームで検討を重ね、カタカナの「ネイティブズム」を採用した（翻訳から十年以上たった今読み返したが、nativism をカタカナ表記した際の、日本語としてのこなれない感じは否定できない）。

また、翻訳作業に関わっていた当時はわからなかったことだが、native という英単語は、日本語に訳すことが難しいのみならず、その言葉自体問題を含んだ語であるらしい。桑山敬己氏の『ネイティブの人類学と民俗学』によると、「英語の native という言葉は、『生まれる』や『生来の』を意味するラテン語 *nativus* に由来する。だから、語源論的には誰もがいずれかの場所のネイティブであるが、植民地時代の人類学者は非西洋のネイティブを『土人』扱いしたため、『ネイティブ』という言葉には侮蔑の念が込められるようになった<sup>3)</sup> という。つまり、この語には、支配者と被支配者の不平等な関係が刻印されており、植民地主義的な意味合いがあったのである。アメリカ人研究者が日本の国学思想を nativism と呼ぶことには、非西洋の自文化研究を呼ぶ時の不平等な関係がなにがしか反映されているのかもしれない。

いずれにしても、native ならびにその関連語は、極めて厄介な言葉である。これらの英単語に付随する問題点を指摘し、アメリカ人の特殊な見方として問

題を終わらせることもできるが、今しばらくこの語について考えたい。私には、native という語の厄介さは、世界のあちこちで——もちろん日本でも——個人あるいは集団の「生まれ」が意識された時起こりうる問題の厄介さに由来するのではないかと思われるからである。

## native consciousness（生まれ意識）という観点について

私はあえて native という語にこだわり、日本意識研究において、native consciousness という観点を加えてはどうかと思う。ここに至って、問題含みの英単語である native とその関連語を、和訳することなく使用しようというのは、自分にとって耳慣れない英単語 native consciousness を使うことによって、native という語の厄介さに自覚的でありたいと思うからである。そして、native consciousness なる観点を持ち出すにあたり、現段階で考えられることを指摘する。

まず、nativity は一人一人の個人にとって、曖昧であると同時にその人の存在と深く関わるという点である。私見によれば、nativity はどこか曖昧かつ不明瞭である。nativity の曖昧性を指摘すると、いらだちを示すひともいるだろう。誰の子としてどこでいつ自分が誕生したかは明白であり、そこに曖昧な点など微塵もないというひとの主張ももっともである。しかし、出生地から転居を繰り返して育った場合、生まれが不明であったり様々な事情で公表できないという場合はどうなるのか。そう考えると、全てのひとにとって、nativity は必ずしも明白とはいえない。また、もっと根源的なことをいえば、人間誰も生まれた時のことを記憶していることはできず、自分がいかなる状況で誕生したかは、他者からの伝聞に頼らざるを得ない。その意味で、誰にとっても nativity はどこか曖昧だといえよう。

日本で個人の nativity が問題になる際は、その人が生まれ育って人格形成をしていく場所や人間関係など、個人を取り巻く環境全てが含まれるのではなからうか。よって、自分が自分としての人格を作り上げて行く過程において、nativity は決定的な意味を持ち、一個人にとって、nativity はアイデンティティの一部になっていく。それゆえ、故郷であれ一族であれ地元の何かであれ——

自身の nativity に関わる何ものかを否定されたり無視されたりすると傷つく。Nativity が自身の存在と深く関わるが不明瞭であるため、それを意識するにあたり、ひとは常に新しい物語を構成しなければならないのではないだろうか。

前掲の『ネイティブの人類学と民俗学』によれば native は関係概念である。native という言葉の指示する人間の範囲は固定されないというのだ。関係概念であるとするなら、その指示範囲は流動的であり、しばしば村や町、市や国といった特定の空間に重ねられるのではなからうか。

日本では出身地を尋ねる時に「お生まれはどちらですか」「お国はどちらですか」などという表現があるが、この問いに対して何と答えるとしっくりするだろうか。私の場合、国内で問われたら、「東京」と答えることが多い（都民ばかりが集まっていたら、都内のどこかが話題となるだろう）が、多国籍企業のパーティーのような場合、日本から離れた外国などでは、「東京」で通じるだろうか。おそらく、場合に応じて、もっとも妥当と思われる選択肢（東京、日本など）を選ぶだろう。自分の nativity は状況に応じて異なったかたちで意識されるのであり、native consciousness も、そのつど異なる様相を示す。nativity は関係概念であるが、nation は特定の領土と結びついているため、具体的な形状を把握しやすい概念といえよう。National consciousness と native consciousness は同一のものではない。だが、定形を持たないがゆえに不安定で、個人の self consciousness と密接な関係を持つ nativity と定形を持つ nation とを重ね合わせることによって、両者は一致し一体化し、native/national consciousness のかたちで安定し、強固なものとなる可能性がある。

Nativity は個人の存在と深く結びつくため、native consciousness はどちらかというところを肯定されることを望む。誰しも、自身の nativity を否定的に意識するよりは、肯定的に意識する方が、生きやすいからだ。すると、native/national consciousness もまた、自ずから肯定されることを望む。その結果として、「自分が生まれた国だから日本を肯定したい」という意識の働きが予想される。

ところで、西川長夫氏の『国境の越え方』を読んでいたら、現代の若者たちのあいだに「日本が好き」という感情がひろがっていることが指摘されていた。さらに、彼らの「日本が好き」の理由について

私がここで特に問題にしたいのは、日本人だから文句なしに日本が好きで、生まれた国だから愛するのは当然だ、という発想である。この命題は一見、論理的に見え、また有無を言わせぬ正しさをもっているように思える。

はたしてそうだろうか。この「だから」は論理的な必然性をまったく示していない。われわれは同じようにして、日本人だから日本が嫌い、母国だから日本を嫌うのだ、といってもよいはずである。<sup>4)</sup>

と述べられていた。ここで留意すべき点は、日本人が生まれた国として日本を意識する際（私の言葉でいえば、native/national consciousnessとしての日本意識を持つ際）どうしても、その意識は肯定しようという方にはたつきやすいという点であろう。「自分の国だから嫌い」と「自分の国だから好き」のどちらが、意識主体にとって安心をもたらすかを考えればよい。しかし、こうした意識はともすれば、自己愛に陥りやすいという面に注意しなければならない。このような native/national consciousness は、時に自己に対しても他者に対しても強力に作用し、抑圧的な力をも発揮する可能性があるのではないだろうか。

忘れてはならないのは、日本の内部に住みながら、日本の外部に生まれがあるという native consciousness を持った人々（例 在日外国人）、日本の外部に住みながら、日本の内部に生まれがあるという native consciousness を持った人々の存在（例 日系移民）である。彼らは、私が持ちうる native/national consciousness としての日本意識とは異なるかたちで日本を意識しているに相違ない。多様な日本意識を可能な限りカバーしていくことが、本研究には望まれるのではなかろうか。

## 私はどのレベルで日本を意識するのか

人間が自身の nativity を意識するのは、どのような時だろうか。Nativity が個人の存在に関わる以上、この問題を考えるために私の極めて個人的な経験を語ることをお許しいただきたい。

私は1981年に東京都にある国際基督教大学高等学校（以下ICUHSと略す）に入学し、3年間を過ごした。親の海外勤務などに伴い、家族とともに外国で暮らした経験を持つ生徒を受け入れるために1978年に創設された学校であったので、生徒の過半数は海外からの帰国生徒によって占められていた。私は帰国子女ではなかったが、国内中学出身者の受け入れ枠で入学した。私の如き純然たる国内組が少数派という、思えば特殊な環境であった。

ICUHSの教員達が執筆した『帰国生のいる教室』には、帰国生の特質の一つとして『『日本』とはなにか、『日本人』とはなにかということに対して強い関心を抱いている』と書かれている<sup>5)</sup>。私にとっても、帰国生たちが極めて強い「日本意識」を持っていたことは驚きであった。

帰国生たちは何かにつけて「なぜ日本ではこうなんだろう」とか「日本のここが好き」あるいは「嫌い」などと、いちいち驚いたり批評していた。とくに印象に残っているのは、「なぜ、日本の学校では制服を着なければいけないんだろ」「放課後、なぜ日本の生徒は教室の掃除をしなければならないのかしら」などという彼らの疑問である。私にとってあまりにも当たり前で意識したことすらなかった事柄が、彼らには「謎の日本的現象」であった。彼らは率直に私のような国内生に様々な質問をしてきたが、そのたび日本人を代表して解答せねばならないような気にさせられ、困惑したものである。

級友たちは、人格が形成される一時期に日本を離れながら、いつか日本に戻ることを意識しながら海外で暮らしていた。そして、当然だが外国人からは「日本人」扱いを受け、時には優遇されたり差別されたりした。そのような経験を経て、故郷日本に戻ると、今度は思いがけないことが驚きの連続である。それが強烈な日本意識となって噴出したのであろう。しかし、入学当初の私には、帰国生たちがことあるごとに「日本」「日本」といいたて、感情をあらわにするのが不自然に思えて仕方なかった。そして、ICUHSでわかったのは、国内生の私にとって日本とは、あえて自分を結びつける必要のないほど、自明すぎて意識にものぼらない何かであったということだった。もちろん、当時の私とて、自分が日本国の内部で生まれたことを知っており、当然日本語を用い、日本という国について中卒者が常識的に持っている程度（世界地図の中での位置づけ、歴史の概略等）の情報は持っていた。だが、国内に生まれて国内



で生活している限り、日本をことさら強く意識しなくても一少女の日常生活に支障はなかったのである。

帰国生の日本意識は、自らの nativity と日本という nation を重ね合わせた native/national consciousness というべきものだったと思う。私は級友たちのような強い native/national consciousness を持ったことがないが、それは人生のうえでたまたま必要がなかったからである。ただ、私自身が日本国内の生まれであることは認識しているので、自分の nativity と日本という nation を重ね合わせて意識することは、自分にとって自然であり可能である。状況によっては native/national consciousness が意識にのぼってくるであろう。

1980年代からすると、現代はいよいよ国際化の時代であり、日常生活レベルで日本意識を持つ機会が増えていると思う。それは、いついかなる時に日本意識を抱くのであろうか。例えば、成人になった私が、預貯金の運用のため、外国株式と国内株式を買うことを思いついて資料を眺めたとしよう。その際は、外国も日本もともに強く意識するわけだが、経済的利益を重視するからには、「得をしたいから国内株を買おう」という判断も、「得をしたいから外国株を買おう」という判断もあり得る。こうした時、私は自分の native consciousness を度外視しているのである。しかし、考えているうち、私が「日本人だから国内株にしよう」と思ったとしたら、どうだろう。「日本人だから」と「国内株にする」との間には、経済的論理は成立しない。むしろ、この時はたらいっているのは、native consciousness と national consciousness とが一体化した日本意識とみるべきであろう。

私はどのレベルで日本を意識するか、それはその時々で変わる。その意識は、national なものとしてなのか、それとも local なのか、またはそこに native consciousness が付随しているのか、否か。意識主体にとって、思いがけなかつたかたちで浮上する日本意識を、そのつど見きわめることが必要なのではないだろうか。

## 日本はどのレベルで意識されるのか——類型化の試み

以上を前提に、これまでの研究会の話題に即しながら、日本がどのレベルで

意識されるかについて、考えてみたい。まず、日本を日本列島上のローカルなものとして位置づけた時の日本意識 (L) と、時代によって範囲は異なるものの対外関係を念頭に置いた一国のまとまりとして位置づけた時の日本意識 (N) の二種類のレベルがあるのではなからうか。さらに、その各々に、native consciousness が付随しない場合と付随する場合を想定すると、

- (L) local consciousness としての日本意識
- (N/L) native/local consciousness としての日本意識
- (N) national consciousness としての日本意識
- (N/N) native/national consciousness としての日本意識

の図式が考えられる。

(L) を設定したのは、小口雅史氏の報告内容<sup>6)</sup>による。小口氏の報告では、日本中世史上、中央から見て辺境地域であった東北あたりから北海道までも包み込む異域全体の総称として「日の本」があり、その支配者は「日之本将軍」と呼ばれたことが総括的に論じられた。中世の「日の本」は通常の「日本」とは異なるレベルのものであると理解し、この「日の本」を、日本列島上の地方的日本とみなせば、「東方日の本」意識は、local consciousness としての日本意識といえるのではないかと思う。さらに、この「東方日の本」を、意識主体が自分とは関係のない異域としてみる場合と、自らの生まれと関係づける場合とでは、ありようが異なるだろう。そこで、前者を local consciousness としての日本意識、後者は local consciousness と native consciousness が一体化したかたちでの日本意識として二分してみた<sup>7)</sup>。

これに対し、(L) に対する中央であり、時代によって範囲は異なれど統一的な nation のようなものとしての日本についての意識を (N) としてみた。日本意識といった場合、ほとんど全ては (N) に該当すると思われ、研究会で扱われた日本意識も、多くは (N) であったのではなからうか。それを、意識主体が日本を自分の nativity と結びつけることなく一つの国として意識する時の日本意識 (N) と、主体が自分の nativity と結びつけた時の日本意識 (N/N)

に二分する。外国人で日本を興味深い国として調査対象として選び、研究しているという場合、その人は日本を意識していると思われるが、自らの nativity と日本を直結させてはいないのではなかろうか。ただし、日本人とて、常時日本を意識するというわけでも、また自らの nativity と関連づけて意識するというわけでもない。状況に応じて、意識主体の中に、(N)あるいは(N/N)レベルの日本意識が浮上するものとする。

これまでの研究会で話題となった、日本人の思想や文学作品に見られる日本優越意識とは、自分の生まれた国を他国よりも優れたものとして肯定したいという意識であり、これは native/national consciousness の強いあらわれと解釈できるのではないだろうか<sup>8)</sup>。そして、日本の優位を認めることが困難な場合、劣等意識を抱くか、おのれの優越性を示すために様々な論理や表現を編み出すことになるだろう。ただし、こうした日本意識は、対他関係を前提として生ずるものである。自国ならびに他国に対する知識なくしては、意識化されないものと思われる。

前掲のワークショップの際に、崔官氏は、東アジアにおける18世紀を「自国の文化についての意識が高揚した時期」としながらも、文化の担い手が中国・朝鮮・日本では異なると述べられた。つまり、上流階級が芸術や文化活動の中心的担い手であった中国・朝鮮に比し、日本の場合は武士と町人の二つの階級が各々文化の担い手として独立した行動をとっていたという<sup>9)</sup>。東アジアの中でかくの如き特徴を持った近世日本であるならば、多様な資料群の中に、当時の人々の日本意識が表現されているに相違ない。私は「近世日本の大衆文化における日本意識の表現」の研究分担者であるので、今後大衆文化の資料に見られる日本意識がどのレベルのものであるのかを、具体的にすくいあげていくことを課題としたい。

## 『風流志道軒伝』の日本意識

『風流志道軒伝』をめぐる田中氏の問い、「ナショナルかローカルか」から脱線し続けたので、最後にふたたび『風流志道軒伝』に戻ることにしよう。この作品で、浅之進はどのような native consciousness を持ち、それと日本はど

のように関係するのであろうか。まず主人公浅之進の native に関わる部分に注目する。

元来此志道軒が親は、さる屋敷の用人を勤めて、其志浅からぬ、深井甚五左エ門といへる、筋目正しき人にてぞ有ける。此甚五左エ門四十に及びて、男子なき事を深く憂、夫婦一所に浅草の観音へ、三日の通夜籠をなんして祈けるに、満ずる夜の暁、南の方より金色の松茸、臍の中へ飛び入ると見て懐胎し、男子出生ありしは即ち此志道軒なり。

主人公は氏血統の正しい親のもと、浅草観音の申し子として生まれたのだった。この特殊な生まれの人物が、仙人の羽扇を授けられ、江戸を残らず眺め、日本国内を隈無くめぐり、次に諸外国へと旅に出る。大人国では、「我は日本の者なり」と名乗り、日本人の見世物にされるなど、奇抜な経験をする。唐では官女の閨に忍んだところをつかまえられ、帝王に対して「我は日本江戸の者」と名乗る。Nativity は関係概念だといったが、浅之進もまた、状況を読んで「日本」「日本江戸」を使っているのである。そして、最初に引いた「我が故郷の日本には、不二といへる名山あり」という表現にたんてきにあらわれているとおり、主人公の native consciousness は日本に重ねられている。よって、この作品中、主人公は native/national consciousness としての日本意識を持っているということがいえる。

主人公浅之進をかくの如き日本意識を持つ者として書いたのは、いうまでもなく作者平賀源内である。浅之進の日本意識を、源内の日本意識といっても、あながち間違いではないだろう。じっさい、『風流志道軒伝』の終わりには

(筆者注・唐では)天子が渡り者も同然にて、気に入らねば取り替えて、天下は一人の天下にあらず、天下の天下なりと、へらず口をいひちらして、主の天下をひつたくる、不埒千萬なる国ゆゑ、聖人出て教給ふ。日本は自然に仁義を守る国故、聖人出ずしても太平をなす。(中略)日本で天子を疎略にすると、慮外ながら三尺の童子もだまって居ぬ氣に成るといふは、忠義正しき国ゆゑなり。夫故にこそ天子の天子たるものは、世界中

に双国なし。

と、外国に比べて日本が忠義正しい優越した国との表現がみえる。興味深いことに、『風流志道軒伝』の刊行年（宝暦13年）は、源内が賀茂真淵の国学に共鳴して門人となった年でもある。源内は国学的な、日本優越意識を持っていたといえよう<sup>10)</sup>。

それでは、なぜ源内は native/national consciousness としての日本意識を持つにいたったのか。いうまでもなく、源内は、外国の新知識を学び、国内を東奔西走した知識人である。そのような人物であるからこそ、自らの nativity を志度浦に限定せず、日本にまで広げて意識することができた。さらには、外国との関係において日本をとらえ、国益を考えたのである。このような人物の意識は、当時としては特殊であろう。源内的な日本意識を共有するかどうかは読者にゆだねられている。しかし、作品を通じて、作者の日本意識が読者に伝えられたというのも当時の社会の一局面であった。

## おわりに

日本意識という巨大なテーマを前に、何からはじめるべきかわからず、とりあえずこれまでの研究会で得た知識を自分なりに整理し、自分の課題を示した。本研究プロジェクトには日本人研究者のみならず、外国人研究者も多く参加している。そのため、ほとんどの参加者は日本を研究対象として意識しており、この点で共通している。しかし、世界の中の数ある国の一つとして日本を意識するか、自分の生まれと関係づけて意識するかで、その日本意識は異なるのではなからうか。日本生まれの日本人である私は、ふだんはことさら日本を意識していなくとも、何かの折に「我が故郷日本」が浮上する。ここに、過剰な自己愛が入り込まないよう自覚しつつ、研究を行いたいと思う。

## 注

- 1) 田中優子『『日本』と『国益』—その複数の意味』法政大学国際日本学研究所研究成果報告集『国際日本学』8号、2010年。
- 2) 本稿での『風流志道軒伝』の引用は、日本古典文学大系『風来山人集』（岩波書店、

1961年)による。

- 3) 桑山敬己『ネイティブの人類学と民俗学』弘文堂、2008年、第1部第1章総論を参照した。
- 4) 西川長夫『[増補] 国境の越え方』平凡社、2001年、51ページ
- 5) 渡部淳・和田雅史編『帰国生のいる教室』NHK ブックス、1991年、218ページ
- 6) 小口雅史「国号『日本』(にっぽん)『日の本』(ひのもと)の起源とその意味、そして後代への影響」「<日本意識>の変遷古代から近世へ」第2回研究会、2011年1月8日、於法政大学国際日本学研究所セミナー室。
- 7) 斎藤利男「日本・日の本と日の本将軍 —中世日本の東方問題—」(羽下徳彦『中世の地域と宗教』吉川弘文館、2005年)によると、東方日の本の呼称の背後に、東方の人々の「自立の意識」「独立の気概」があったとする研究者の見方が整理されている。それに従えば、東方の人々は、中央とは別のものとしての東方日の本を自分の国として強烈に意識していたことになり、そこには、東方の人々の native consciousness がはたらいていると考えてみた。
- 8) 例えば、韓京子「近松の浄瑠璃にあらわれた日本優越意識」や、横山泰子「玉藻前説話にみられる自国意識と異国趣味」など。いずれも前掲『国際日本学』8号に所収。
- 9) 崔官「18世紀をとらえる観点」前掲『国際日本学』8号所収
- 10) 国学者としての源内については、浅野三平『近世国学論攷』翰林書房、1999年を参照した。

本稿を成すにあたり、法政大学理工学部福澤レベッカ教授に御教示いただきました。ここに記し、感謝申し上げます。

<ABSTRACT>

## **National, Local or Perhaps Native?: At What Level Do I and Hiraga Gennai Perceive Japan?**

YOKOYAMA Yasuko

How do we perceive Japan? The question, “National or Local”, which Professor Yuko Tanaka suggested in September 2009, is important when we advance the research project “The Expression of “Japan” Consciousness in the Mass Culture of Early Modern Japan”. I added a new term “Native” to these two words and examined the relationship between the national, the local and the native.

When we say “Japan-consciousness” we have to examine the state of the subject of consciousness. It seems that “Japan-consciousness” will be different according to the manner of perception: whether one perceives Japan as one country of many countries in the world or as ones mother country. In this paper I tried to discuss how the state of “Japan-consciousness” is dependent on the birth of the subject of consciousness, nativity, through descriptions of Hiraga Gennai’s *Furyūshidōkenden* and my own experience. I also explained the necessity of examining whether “Japan”, the object of perception, is national, native, or both in each case.